

	<h2 style="margin: 0;">日置 敬様を偲んで</h2> <h3 style="margin: 0;">SCE・Net 中島 幹</h3>	<p style="margin: 0;">E-157</p> <p style="margin: 0;">発行日</p> <p style="margin: 0;">2022/3/30</p>
---	--	---

日置 敬様が2月に亡くなられていたことを代表の中尾様からの連絡で知りました。1931年のお生まれですから、90歳のご長寿を全うされたのです。

日置敬様は、2001年に元 TEC の篠原孝順さんの紹介だと思いますが、化学工場の生産現場の技術に詳しいからと SCE・Net に入会して頂きました。

三井化学の前身である東洋高压の肥料製造の技術部門に永く関係されていました。今のように現役時代のことを話す技術懇談会も無く詳細をお聞きする機会を失いましたが、SCE・Net の趣旨に強く賛同され顧問格としていろいろな相談に乗って頂きました。主に工場の安全に関する研究会やその後の懇親会には熱心に参加されて居ましたので、安全研究会の中では詳しくご存じの方も居るかと思います。

SCE・Net の発足当時は化学工学会の内部でも知名度は低く、なんとか企業経験者の知恵と社会のニーズとのマッチングによる新たな価値を創る場としての SCE・Net の存在を拡げたいと、学会行事では PR の為の機会をお願いしていましたが、中々拡がりが見えませんでした。

そんな時 化学工学会の技術賞があまり知られていないので、この賞の知名度を上げることと、これを活用してはとの発想から受賞各社に働きかけて、受賞した技術を基に各社の技術力の宣伝にも役立つ出版物を作る構想が生まれ、SCE・Net として初めて出版に取り組んだのが「進化する化学技術—オンリーワン技術への挑戦—」です。

技術書を出版していた工業調査会の一色和明さんから縦書きで技術書らしくしない方が読んでもらえるとの提案に対しても積極的で、SCE・Net メンバーの編集企画をする中で日置さんの存在感は大きな力となりました。

技術賞が始まった 1966 年から 35 年間の総数 126 件の中から技術開発事例としての 39 件を取り上げ、開発に携わった技術者自らが 開発の狙い、その手法、開発技術の特徴、課題など化学工学の副教材にもなるようにと、難しい内容を分かり易く解説するように心掛けました。特に目玉としたのは事例ごとに SCE・Net の編集担当がその技術開発のポイントを数行の簡潔な紹介文にまとめて付けたことでした。

日置さんは 次の 5 件を担当され、夫々に的確な紹介文を書かれました。

- 「ポリフェニレンエーテル/ポリアミド系ポリマーアロイのリアクティブプロセッシング技術開発と工業化（住友化学） アロイ化反応の機構を解明」
- 「酢酸セルロースの生産技術革新（ダイセル） エネルギー多消費型プロセスからの脱却」
- 「窒化アルミニウム粉末製造方法の開発（トクヤマ） 還元窒化法の改良で粉末の品質をレベルアップ」
- 「BOG 再液化プロセスの開発（大阪ガス） 極低温蓄冷技術開発で冷熱利用率が大幅向上」
- 「ヒト正常細胞培養技術によるインターフェロンベータ製剤（フェロン）製造法の工業化（東レ） 世界に先駆けて大量製造技術を完成」

例えば 酢酸セルロースの生産技術については、
「新製品開発の華々しさに比べ製造技術の改良はとかく地味な評価を受けやすいが、斬新な発想に基づく”新製造プロセス”の完成は企業にとっても大変貴重な成果です。永年改良を重ねてきた既存製造技術の壁を破るには抜本的な発想の転換が必要です。（中略）多くの独創的手法を採用して新溶媒蒸発プロセスを完成させ、大幅な省エネと生産性向上を達成したまさに画期的な**もの作りの業**です」 との紹介文を書かれています。

化学工場の生産現場での多くの経験を積まれて、新たなプロセス開発の重要性を主張されていた、その頃のお姿を彷彿とさせるところです。

なお 元会長の小宮山先生は「10 年後、20 年後に本書と同じく化学工学会の技術賞をまとめた本を出版して頂きたいものである」と学会誌の書評に書かれています。

SCE・Net の発足時に 大変にお世話になりました大先輩 日置 敬様のご冥福をお祈り申し上げます。 合掌